

# 哲學研究

第五十八號

第一卷  
第一號

## 意識の程度に就て

千葉胤成

凡そ意識が現象として存在すてふことは同時にそが或度に於て明瞭なることを意味する。而して或度に於て明瞭なりてふことは之を他の方面より見るときは又或度に於て不明瞭なりといふことが出来る。略言すれば意識現象は凡て或明度に於て現するものであるといふことが出来る。ウツルフは全然不明なる思考は意識を停止するものなりと云ひ更に思考の明瞭不明瞭は意識の基礎なりと云つて居るが、此意味に於て頗る意義ある言なりといはなければならぬ。

1. 抑も意識の統一性は其統制の差異を生じ茲に意識の程度を區別せしむるもので

ある。而してこは通例意識の明度と名けられて居る。されど所謂明は暗に對する明にあらず明の種々の度を示すものにして暗なる意識は吾人之を思惟するを得ず恰かも黒が感覺にあらざると一般である。故にこは寧ろ意識の程度といふを妥當なりとすべきである。然るに意識の程度てふ概念は種々なる意味に解せられ程度の段階に關しても異説存する。よりに吾は茲に先づ意識の程度の概念を明かにし次に意識程度の段階につき考察しやうと思ふのである。

一

前述の如く意識の程度に關する問題は意識の統一性に其基礎を有する。即統一の完全なるほど益々意識は其程度を増し統一の不完全なるときは之に反し其程度を減ずるものである。即統一の不完全は以て意識の程度を考察する準則たることを得るものである。

此の如く意識の程度は意識の統一性に基礎を有し而して其不完全は特に識別作用に密接なる關係を有するものである。されど意識の程度は意識に固有なる特徴にして意識現象の或特殊の作用のみに依繫するものでない。然るに程度を以て或

特殊の意識作用に歸するものがある。例へばテイチエナ<sup>(1)</sup>は程度を以て感覺の一屬性なりとして居る。曰く『明度は或範圍内にありては他の共存屬性と獨立に變化し得るのである。先づ明度が感覺の屬性として獨立の状態にあることは疑ふことが出来ぬ。されど獨立の状態は必ずしも獨立變化性を意味せず問題は明度は強度と獨立なりや即感覺は強めらるることなくして注意され得るやにある』と。抑も強度と程度との兩者が相互に親密に關係することはヴント、キエルペ、エッペングハウス等によりて明かである。ヴントはいつて居る『兩屬性は相互影響を與ふることが出来る。即一刺戟が無注意の際意識に達し然る後同じ強さにて反復さるるとき、例へば塔時計が待設けざるに鳴りたる場合の如き第二の印象は唯に明瞭なるのみならず恰かも一層強さが如く知覺される。同様のことは想起又は想像心像を喚起し之を意識内に強く固守せんと努力するときにも示すことが出来る。』と。又キエルペによれば『或る狭き範圍内にありては内容は注意の状態に於て實際強めらるゝものである……注意せずに經驗される高音の感覺は注意されて經驗される低音の感覺に等しく聞ゆる。又無注意の觀察による判断の變化は常に印象の強度的空間的或は時間的價値の減少により生ずる變化と正に同様なることを注意するは興味あることである』

4  
云々と。エビングハウスも亦實驗的論證は疑ふべきも一般の經驗よりして『注意を向くることによりて感覺の強度が高まることは全く事實なるが如し』と云つて居る。勿論此事に關してはミュンステルベルヒの之に反對するあり彼によれば『注意に強勢の働はない。新しき實驗はフェヒネルの示せる經驗の誤なることを示して居る。即ち注意の向けらるゝ場所にある灰色の紙は一層白く見ゆることなく、如何に注意するも弱き光がより強く輕き重さがより重く短き線がより長く低き音がより高くなることがない』と。而してマッハ及ストップフは此問題を決するため小風琴の前に坐し通例の音樂的和階音中の或要素に注意することによりそが強まるか否やを観察せる結果を次の如く云つて居る。『マッハは明かに強まることを認めたりといふも余は此の如きを見出すことが出來なかつた……而してこは恐らく個人的差違によるであらう』と。此の如くなるを以てテイチエナーの注意せるが如く實驗を施行せんとせば内省上の相異の起らざる如き方法にて之を試みなければならぬ。而してそは放散の方法によりてするにある。茲に於てベントレーは通例の重力音度計によりて生ずる音を用ゐる各對の一に最大の注意を拂ひ他は注意より全く放散し而して放散のためには嗅を用ゐた。かくて二音一は強く一は弱き與へられ弱き方注意せられ強

き方放散せられたりとする。然るとき若しも二音が同じ又は弱き方却りて強しと判ぜらるとせば注意の状態に於て感覺は強まるてふことを證し得べきである。然るに二百八十五の判断中百三十六は注意されし刺戟の過大視を示し四十は過小視を示し而して百〇九は二つの刺戟の關係を正當に報告して居る。なほ多くの實驗も略同様の關係を示したのである。之によりて見るときは強並に弱の音が注意により強められ或は消極的には放散（放散）によりて弱めらるてふことは疑ふことが出來ぬやうである。テイチエナーは是等の事實は以て自己の所論を證するものとなし而してそは後彼がブリッツの批評に對する辯護に於て特に高調せられて居る。即曰く「吾人は感覺の性質強度を示し得ること明度を示し得るが如し。されど之を定義せんとすれば遂に同語反復に陥るを免れぬ」と。更に「感覺的延長が空間知覺の要素的現象たり感覺的繼續が時間知覺の要素的現象たるが如く感覺的明度は注意に於ける究竟的事柄たり」として居る。されど第一に獨立變化性の故を以て直に感覺の屬性なりとするは誤てり第二に空間的時間的知覺と注意とを同列に論ずることは妥當でないと思はれる。

## 三

テイチエナーに對し有力なる駁論をなしたるはブリッツである。<sup>(十三)</sup>彼は明度を以て感覺の屬性なりとせば同様に亦感情の屬性たり得ざるやを指摘し、更に進みて明度が感覺の屬性ならざる所以を述べて居る。彼は先づ心的内容の屬性とは何ぞやを問ひ之に對し五つの準則をあげて居る。即一には屬性は感覺の不可分離的表徴をなすこと、二には一屬性が零に等しくなるときは其屬する感覺も亦零に等しくならざるべからざること、三には屬性は究竟的にして其以上分解すべからざるものなること、四には性質以外の他の凡の屬性は他の感覺を生ずることなしに相互獨立に變化すること、五にはあらゆる屬性の記述を以て又感覺が充分に與へらるべきこと、是である。扱て吾人の第一に區別すべきことは感覺的注意による分離と抽象による分離との間の差である。即感覺屬性は第一の意味よりするときは分離的ならずして不可分離的であるが第二の意味にては云ふまでもなく分離的である。今明度の問題につき考ふるに感官的注意によりて分離すべからざる現象は同時に又感覺屬性として認むべきでない。夫故に結局不可分離の準則は吾人の斷定をなすに充分なる

ものでないのである。次に明度が零となるとき感覺も零となるかの問題につきてはヴァントは之を拒んで居る。彼は意識闕或は強度闕をば明度闕或は統覺闕より區別して居るが、一心的内容が明度闕より沈下し夫故に其明度が零になるときにもそれがために意識闕より消失せるにあらず、従つて又感覺が此際零になれるにあらずと云ふことが出来る。更に明度は獨立に自ら變化するやに對しては次の如く答へざるを得ぬ。即明度と共に又強度も變化するを以て獨立性につきいふことを得ずと。此に吾人は知覺屬性の變化てふことをいふも實際には變化なるもの存せず全く新しきものにして従つて他の知覺が與へらるゝに過ぎぬ。夫故に第四の準則につきては獨立變化の屬性としての明度の規定は最早支持するを得ずと結論せざるを得ぬ。終りに一定數の屬性の記述を以て感覺を餘りなく表はし得たりとするも此ことは屬性は究竟的にあらず即そは複合的にして其以上の究竟的屬性に分たるてふことを結論するを得ぬ。以上を總括するときは次の如くなる。第一に不可分離性の準則を吾人は一義的ならずとして拒まなければならぬ。第二に屬性が零となると共に感覺も亦零となるてふ要求に反對にそは明度の場合には充されぬ。第三に感覺の屬性とせられたる明度が究竟的にして最早分解されざるかの間に對す

る答は猶豫されなければならぬ。第四に吾人は明度が獨立變化の屬性と見らるてふことを許すことが出來ぬ。第六に明度の概念なくも感覺の充分なる記述可能である。

ブリッツは此の如くして進みてヴント、ティチエナーの見解を批評して次の如く述べて居る。ヴントによるときは意識態の度てふ語は統覺知覺を含み一層一般的なる言表である。かくて『統覺の場合にも知覺の複合に於ける如く種々の明度現はれ得』と云つて居る。ヴントの此考より二つの重要な結果が生ずる。即第一には明度は統覺の唯一の準則たるべきも同時に知覺にも現はれ然るときは最早統覺の事實を精確且一義的に特徴つけ得べき準則たるを得ざること。第二には明度はあらゆる心的内容に現はれ又そは内部視點或は注意野を越えて内部視野の最後の段階迄擴げ得ることは是である。此によりて吾人は更に次の結論を導出すことが出來る。即吾人は少くとも意識度及明度に對し妥當性の同一範圍を確立し得ることである。或は曰はむ。ヴントは既に吾人の指示せる如く注意閾を意識閾より分ち之を明度閾及統覺閾と名けた。従つて兩範圍は同一領域を有せず明度の方狹しと考ふべきではないかと。併しヴントが統覺閾を又明度閾と名くとせばそは少くとも誤想であ



る。何となれば明度は此に始めて現はるゝものにあらずして其高度を以て表はれ居るに過ぎぬからである。換言すれば明度と意識度とは同一概念にして唯意識度が一内容の明度を規定する。兩者は同一事實の異なる名に過ぎぬのである。彼は更にテイチエナーの見解に言及して云つて居る。テイチエナーの場合には明度は唯に感覺のみならず注意と親密なる關係を有する。即ち其最も簡單なる形にては注意は感覺的明度と同一である』と云つて居る。而して此考に次のことが相應じて居る。即ち明度と注意度とが同一言表なることは是である。意識の水準は結局明度の差違により特徴づけらるゝが故に注意度明度及意識度を同一視することを妨げぬ。されど此に多くの困難存する。

(十四)

ブリッツは更に之を實驗的研究に徴し其論據を確立せんと試みた。彼はシューマンの瞬間露出器を用ゐる種々の色を露出し被験者をして其内省する所を陳述せしめ之により得たる結果より次の如く述べて居る。呈示されし色の體驗は最も多様であるが而かも是等は皆獨立的である。例へば被験者が暗き輪廓なき斑點を経験せるときは其自身完成的絶對的、實際的知覺内容與へられる。各状態各明度に吾人の場合に又全體なる部分的に異ならざる意識内容應ずる。吾人は事情によりては一般

に性質を経験せず、従つて獨立變化性てふことを得ず、却りて明度は個々の状態に觀察さるゝ差異及變化によりてのみ代表せられる。されど是等の差異は特殊體驗の差異にあらずして吾人の見たる如く全内容に該當する。恐らく或は云はむ、而かも感覺は同一ではないかと。吾人は之に答へんとす、凡の場合に知覺内容は同一にあらずと。夫故に吾人の場合に明度の語は單に次の意味にて用ゐられる。即被験者の考に従ひ一定の色調を其特有の調に於て何等の疑なしに經驗せらるてふことは是である。茲に第三延長又は感覺の屬性ともいふべき特殊の心的現象存せず、恐らく寧ろ種々なる意識の度觀察さるゝのみである。吾人は意識度の代りに明度を置くの要なく、そは唯誤解に導くに過ぎぬ。心理學の範圍にありては明度の語を使用せざるを可とする。又明度は質的か量的かの間に對しては吾人は最早共同(量の概念に従ひ)のものも對立、差異(質の概念に従ひ)のものも假定せざる限り考察を値せぬ所である。なほ又注意の概念を明度の問題と關係せしむることを避けた。蓋し余はシューマンの如く注意は其下になほ種々の要素が總括さるべき概念なりと考ふるからである。

之を要すにブリッ十五によれば明度は感覺の屬性にもあらず、表象の屬性にもあらず

ず此の如きは種々の混雜をかもすに過ぎぬ。然らば明度と意識度とは同一視すべきかに對しては後者の誤解少きにより寧ろ明度の語をば心理學の範圍より排除し意識度の語を用ゐるの妥當なるを覺ゆといふにある。

テイチエナーは之に對し更に駁論を試みて居る。曰く『明度は内包的屬性にして不明瞭より明瞭に迄及ぶものなるに感情は明瞭に非ず不明瞭に非ず唯性質的強度的而して繼續的である。かの傳來的感情の不明瞭てふとをいふは論理と心理との混同によるものである』と。此の如きはブリッツの眞意の存する所を解せざるものにして議論の正鵠を得て居るものといふことが出來ぬ。吾人は感覺感情が其條件として何等かの關係を有するを許すも所謂明度は獨り感覺又は感情に屬する特性と稱することを拒むを以て妥當なりと信ずるものである。彼は更にサントの辯護をなして居るが時代により思想に變化あるの故を以て其論の正當なるを辯ずることが出來ぬ。サントの思想には種々の混雜あるを以て之に關しては更に次に述べやうと思ふ。

#### 四

明度に關するワントの見解は甚だ不定である。彼は或時は感覺にありとし他時は表象にありとし時に或は意識の結合にありとして居る。最初彼は明度をば感覺に關してのみ之を認め而して後之を表象に關係せしめて居るやうである。されど彼は同時に明瞭はそが表象の構素として考へられたるときにのみ感覺につき立言せらるゝとした。是れ彼の感覺と表象との關係を念頭に置くときは直に首肯さるべきことである。然るに最近に至り彼は意識の度と意識態とを區別して居る。所謂意識態の度とは感覺に關係せしめらるゝとして曰く、『内包的心的量は唯心的生活の簡單要素にのみ生じ外包的量は要素の結合より生ず。三つの内包的量は強度性質及明度である。而して是等三つの性質は心的要素の三つの共存延長であり即そは感覺の屬性である。複雑なる内容は其異なる部分に於て異なる明瞭の度を示す。即明度は要素に關し簡單なる内容に關してのみ明かである』と。而かも彼はなほ感覺の強度と性質とよりなるてふ以前の叙述をば其儘保有して居る。而して後には又明瞭と分明とは唯だ表象の性質なりともいつて居る。茲に幾分思想の混惑あるやうに思はれる。更に又意識の度に關しては意識内容の結合の度なりとして居る。彼によれば意識はあらゆる内部經驗の條件たり或は一層經驗的には吾人の

直接經驗の全内容なりとし其本質として一には表象及實際感情が要素即感覺又は簡單感情の心理學的綜合より起ること二には表象又は感情の再生及聯合により結合の預想の下に之を説明し得となし比の如くして吾人は意識の度又は段階の可能を認容しなければならぬ。蓋し感覺が時間又は空間表象に結合すてふ如き關係は種々の水準に於て存し得べければである。自己觀察はよく此ことを示す。吾人が一印象を吾人の表象の組織内に疎鬆に編入するとき又は結合の疎鬆により其を後不完全に覺ゆるときは常に吾人は意識の度の低きを思ふ。是等の場合表象或は心的内容の結合の能は意識の度の尺度と考へられる。即ち吾人はあらゆる内部狀態或は心的要素の結合は意識の或度を表はすものである。（十五）

## 五

明度或は意識の程度が感覺の屬性たりといふことは前述の如く吾人のとることを得ざる考である。況んや表象の構素として考へらるゝ限りてふことは極めて漠然たる叙述に過ぎぬ。唯所謂意識の度は吾人の意識の明度に相應するものと見ることが出来る。テイチェナーの批評せるが如く意識の度とは元來無意味である。即物質

の度又は物質存在の度といふの無意味なる如く無意味である。且又意識内容の結合は勿論明度の主要なる條件たるべしと雖ども之を以て明度(十九)と同一視し得ざることなほ感覺感情又は表象に歸すべからざると同様である。故に吾人が最初に提言せるが如く所謂意識の明度は其統一性より自ら生じ意識其者に固有なる特徴にして意識現象の或特殊の作用に依繋するものでない。唯意識作用は意志に於て完結すてふ意味に於て意志に特殊の關係を有することは之を許さざるを得ぬ。よりに吾人は茲に更に此關係に就き少しく述べやうと思ふ。

一般に意識内容が明瞭になる作用を明覺と稱し此際の主觀的狀態を注意といはれて居る。ゾントは此明覺作用を分解し一には一定の表象又は表象群の明度の増加にして全過程に特有なる活動感情を伴ふこと、二には現に不用なる他の印象又は記憶心像の禁止、三には筋肉の緊張感覺にして其に結付き原初感情を一層強むる感覺を伴ふこと、四には都合よき條件の下には此緊張感覺が明覺されたる表象の感覺内容を聯想興奮により強むること、五には狹義の注意作用の主觀的伴隨現象として特に全作用の起始に特有なる緊張及弛緩の感情の進行形式等をあげて居る。されど此中明覺作用に本質的なるものは第一第二及第五の部分作用にあり第三と

第四とは偶然の所産に過ぎずとした。之によりて見るも明覺作用なるものは其性質極めて意志作用に酷似するものあり否寧ろ一の意志作用と稱するの妥當なるを感ぜざるを得ぬ。こは既にハミルトンの認むる所近時に於てはウントの所述頗精細を極めて居る。曰く『意志活動の本質的基準とする所は一に動作者により其意欲の動機として考へらるゝ感情強き先行表象而してこは明覺の場合には或は外部印象に或は一定の想起心像に於て與へらる、二に動作の始めに伴ふ感情、而してそは注意の動作の際外部意志動作の場合と同様に觀察せらる、三には動機の影響として現はるゝ意識内容の變化而してそは明覺作用の際には一定の表象の明度の増加よりなる、明覺作用の是等の要素が各他の殊に外部意志動作に規定要素として包含さるゝ限り明覺作用は同時に簡單なる意志動作たり又あらゆる意志作用の構成要素かり云々』と。之によりて見るときは意識の最も原初的活動たる注意に於て既にあらゆる意識の全作用を其簡單なる形に於て包含することを想見することを得、各意識の初發的一念に於て過現未三千世界の諸相を觀ずることを得と考へ得ざるにあらず、參天の大樹一粒の種子を含み一粒の種子參天の大樹を含むの妙觀を表はすものと云ふべきである。

## 六

前既に述べたる如く意識現象は或明度に於て顯現する。而して意識の或一部の明度の増加は他部の明度の減少を意味すること亦一般に認めらるゝ所である。茲に問題は同一意識に於て幾何の明度の水準又は段階存するかにある。

ライブニッツは之を三段階に分ち、其最初の段階は之を *perceptio* と名けこは感覺とも譯すべきものである。次に、*perceptio* が一層明瞭になり回想により伴はるときは之を *sentiment* と名けこは意識と翻すべく、終りに最高の段階は之を *apperceptio* と稱しこは注意又は反省に應ずる所の状態をいふのである。然れども實際上ライブニッツの所謂 *perceptio* と *sentiment* との間に區別を設くることは困難なるのみならず所謂 *perceptio* の状態は之を意識と稱するを得るや否や疑が存する。

ライブニッツ以後意識の明度の段階に關しては異説存し或は三或は二とし時に或は無數にありとするものがある。先づポールドウインは視覺に比類的に意識の範圍を圖式にて表はし四水準以上を區別し得るとした。其中心に統覺立ち其外圍に能動的意識或は注意あり更に其外圍に受動的或は放散の意識あり其又外圍に副意識



あり、其外圍は遂に無意識となる。而して印象は絶えず相互變化しつつ、内部生活の驚くべき百色眼鏡を作りて過行くものであるといふにある。

エンゼルも全然ボールドウインに賛して居る。更にウタードは三段階の意識を區別して居る。曰く『廣大なる範圍の内に意識の中心或は焦點があり、其範圍の或部分は直に亦其焦點になり得るあり、其外に副意識の第三段階がある……されどそは文字通りに副意識たり意識の関は湖水の表面の如く副意識は其下の中部に比すべきである。』而して此副意識の假定は繼續の法則をば知覺の事實に適用せるに過ぎぬと。

此の如く三或は四段階を區別するものなきにあらざるも多くは二段階を區別して居るやうである。其先驅は遠くツッケルに溯り得とせらるゝも稍々明瞭なるに至りしはロツツエである。而して此考はフタルトライゲに傳はり更にヘルムホルツ以後ヅントに迄及びしものと見ることが出来る。ヘルムホルツによれば吾人は感覺の意識に對し二種又は二段階を區別することが出来る』と。是れかのライプニッツの 'perceptio' と 'apperceptio' とに相應するものである。モルガンも意識の焦點と縁邊とを區別

していつて居る。『或瞬間に於て充分明瞭なる意識の頂點をなす重なる要素に加へ

及其に沿うて之と殆んど或は全く直接の結合を有せざる漠然と感ぜらるゝ要素存する。吾人は之を副意識と名く」と。然れども此の如き考の最も明瞭なるに至りしは云ふ迄もなくザントである。<sup>(#6)</sup>

ザントは前述の如き二つの範圍に名くるに内部視點及意識の視野を以てした。曰く『主觀的感情過程と共に注意作用を構成する意識内容の容觀的變化は意識の屬性に依囑し而して與へられたる瞬間に意識の全内容は同じ度に於て意識せられず種々の度に於て觀察せられ各瞬間に多様な變化を呈するものである。吾人は之を視野の場合に比較するとによりて直觀的にするものが出来る。即與へられたる瞬間に現存する全内容を意識に於ける視野及識野と名け特に注意の向けられたる部分に内部視點即識心と名くる。然るに注意は與へられたる瞬間に唯一の内容に限られずして意識の全範圍中或局限されたる領域を取るものであり吾人は之を注意野と名く』と。更に又ザントに従へば或表象が識野に入り來ることを知覺と名けそが識心或は注意野に入り來ることを明覺といふ。但し此場合明覺が幾分統一性を有すてふ意を含むとは注意を要する。レムケは前者を覺知と稱し後者を注視と名けて居る。<sup>(#8)</sup> キェルベも生理的及心理的明度を對立せしめて云つて居る。『如何に意識

の度が關係しあるかを尋ぬるときは吾人は最高より最低に一樣なる段階をなさず多くの場合に可成判然たる區別の線を見出す。即或内容は明瞭なる把握の水準に立ちそれより吾人の意識は移行なしに不明瞭なる一般印象の水準となる。而して第一群の内容の明瞭なるほど他は益々不明瞭となる……夫故に興へられたる瞬間に意識の流の横截面をなすときはあらゆる明度にあらずして一般に著しき間隙により相互離さるゝ二群の作用其上に現じあるを見出し得るであらう」と。彼は之より前コーンに對し同様なる見地を以て論じて居る。即「明不明は反對の方向に生長し而して其に應ずる状態は注意の著しきほど相互容易に區別せらる。此現象は意識の一樣なる數量的段階の代りに二つに分たれたる状態を立言せしむる」と。

此二水準又は二段階説を殊に強調せるはティチエナーである。曰く「余は二水準説が如何にして決定的たるべきかを知らぬ。若しポイルドウィン及エンゼルが統覺的水準の下に三つの意識の度を區別すとせば余は唯ストゥンプの所謂個人的差異に歸し其心意が余のよりも豊富なるを羨むのみ。余は此の如きを見出すことが出來ぬ。』かくて其常用の例をひき來りて曰く『今採し繪を見るに其處には家あり庭あり而して處々に人面の輪廓隠されて居るとせよ。吾人が其人面を探すに當り全體の繪の

内容先づ意識の焦點にある。然るに一旦人面を見出すや如何なることが起るか其際全體の繪は意識の焦點より消失し人面が極めて明瞭に突出する。かくて家や庭は吾人の指間にある紙の觸感位より明瞭でない。此の如く吾人が隠されたる輪廓を見出す度毎に其繪は消失するものである』かくして結論して云ふには『余は飽迄二水準説をとる。勿論其廣さ高さは時によりて異なり而して其面も滑かでない。上水準は確固たり下水準は恐らく折目あり蹉ある如きものであり而かも其蹉は事情により深さと數とを異にして居る』と。

(七二)

七

吾人は上述の多くの學者と共に二水準又は二段階説をとらんとするものである。ポトルドゥインは四水準以上を區別し得といふも其所謂能動的意識は恐らく次の受動的意識に對して特に立したる如き觀あり之を統覺と區別せんとするは餘りに形式的である。又受動的意識と副意識との差異を區別し得ざること統覺と能動的意識とを區別し得ざると同様であらう。更に其無意識は全然意識の範圍外なるを以て吾人の問題とならず若し之を考察に入るときはそれは亦下水準の意識に屬すと

するを妥當とすべきである。次に又ウチアードの三段階中所謂副意識は寧ろ他の二段階に並列すべきものにあらずしてポールドウインの所謂無意識に相應するものと見るべく従つてそは又吾人の問題とならず若し之を考察に入るとするも上述の如くそは下水準に屬すとすべきであらう。ライブニツツの場合に於て見たる如く多水準を立するものは其中の或者は同一水準に屬するか然らざれば意識より除外すべきものと考ふべきである。ブリッツは二水準説を評しそは心理的證明の範圍を脱するものにして明かに凡の經驗に矛盾するものあり、即觀察されし複合中には低き水準の最高のものよりも低き種々の明瞭の度あり、従つて水準、水平、面、平面等のことをいふは許すべからずとして居るが、ライチエナの答へたるが如く若しも與へられたる意識作用に於て低き水準の最も明瞭なるものよりも明瞭ならざるものあらばそは亦低き水準にあるものと云はなければならぬ。(三十三)

勿論理論的には無限の意識の程度の段階を想定することが出来るであらう。而して無限の明瞭は極大の不明瞭に歸し恐らく茲に意識と無意識との微妙なる關係を考ふることが出来ぬではない。(三十三)されど實際的には明かに二つの範圍を劃することを得否劃せざるを得ぬ。或は意識の焦點及縁邊といひ或は識心及識野と名け或

は意識の明不明を以て區別し其所述亦趣を異にすと雖ども皆同様の趣旨を表はさんとせるに過ぎぬ。而して此二段階の關係は實際の觀察に訴ふるにかのキルペ、テテナリの既に注意せるが如く決して一樣なる移行ではない。かの有機體の生長に際し見らるゝ飛躍的段階の差異存する如く又技術的練習に於て一躍して其所謂骨を呑込む際の如くそは全然飛躍的變化をなすものゝ如くである。水泳を稽古して身體の水上に浮み得るに至りし後と前との間には明かに別種の感あり其以前種々の段階あり其以後亦練達の多様の段階存すとするも其等の差異とは全然趣を異にするものゝあるのを覺ゆるのである。大悟四十八回小悟數を知らずといふも悟前の心境と悟後の境地とは自ら亦別趣の味あるべきは想像するに難くない。吾人は意識の程度の段階に關して唯二水準又は二段階を區別し得とすることを妥當なりと信ずる。之を要するに意識の全領域は統一的全體をなすものなれども實際的に吾人は識心識野を區別することを得其以外第三の範圍を立すべきや否やは疑問である。但し茲に識心は識野の全範圍に移動するのみならず識心其者も收縮又は伸張するものなることを忘れてはならぬ。

以上所述によりて明かなるが如く意識の程度は意識に固有なる特徴にして意志

に特殊の關係を有し其段階は實際上識心識野の二を區別することを得而して其範圍には一定の限度が存する。茲に吾人は意識の程度に於て二つの重要なる意識作用の萌芽を認むることが出来る。即そは注意と記憶とである。此二作用はエッペングハウス之を精神現象の基本法則として論述せるが如く諸種の意識作用の基本をなすと見ることを得るものなるが識心に於ける状態に於て注意の根本的形式を見るべく識野に於ける活動に於て記憶の原初的標型を見ることが出来る。唯識に所謂審思量恒思量の區別も一面より見るときは之に對應すと考ふることが出来るかも知れぬ。而して識心に於ける状態を極大ならしむるときは遂に明瞭は不明瞭となり識野に於ける活動を局限するときは不明瞭は却りて明瞬となる。結極明瞭の極は不明瞭なり不明瞭の究まる所明瞭たるものと云はなければならぬ。

吾人は茲に唯意識の程度に關する問題を提供せるに過ぎぬのであるが其徹底的解明は一方には思辨的及實驗的正面よりの考察によりて或度迄到達し得るものならむも他方には寧ろ變態心理的並生物心理的裏面よりの考究によりて大なる光明が投ぜらるゝものがあらうと思はれる。而してこは將來の研究を俟たなければな

註

- (一) Rehnke: Bewusstseins, 1310, 2.  
 (二) 黒は感覺なりとは問題なるが吾人を以て見れば絶対の黒は感覺にあらず。感覺としての黒は幾分の白を含む相對的の黒であらうと思はれる。  
 (三) 學者多く明度の語を用ゐて居る。吾人の考によれば前述の如く程度とするを妥當なりとするも引用には使用者に従ひ明度の語を其儘保存するごとしした。  
 (四) Titchener: Lectures on the Elementary Psychology of Feeling and Attention, 1908, 211-220.  
 (五) Wundt: Grundzüge der Physiologischen Psychologie, II, 1911, 313 ff.  
 (六) Külpe: Outlines of Psychology, 429, 441.  
 (七) Ebbinghaus: Grundzüge der Psychologie, I, 1905, 612 ff.  
 (八) Münsterberg: Grundzüge der Psychologie, I, 1900, 227.  
 (九) Stumpf: Tonpsychologie, II, 1890, 203 ff.  
 (十) Bentley: Psychological Bulletin, IV, 1907, 212 f.  
 (十一) Titchener: Psychological Concept of Clearness. (Psychological Review, XXIV, 1917, 43-61.)  
 (十二) Britz: Eine theoretische und experimentelle Untersuchung über den Psychologischen Begriff der Klarheit, 1913.  
 (十三) Wundt: Grundriss der Psychologie, 253.  
 (十四) Britz: op. cit., 36-41.  
 (十五) Britz: op. cit., 54-75.  
 (十六) Wundt: Grundzüge der Physiologischen Psychologie, III, 1911, 220, n. 307.  
 (十七) Wundt: op. cit., III, 307 ff; I, 539 ff.  
 (十八) Wundt: op. cit., III, 296 ff; 321; 299.



- (十九) Titchener: Psychological Concept of Cleanness. (Psychol. Review, XXIV, 1917).
- (二十) Wundt: op. cit., III, 1911, 315 ff.
- (廿一) Wundt: op. cit., 316 ff.
- (廿二) Baldwin: Hand Book of Psychology. Senses & Intellect, 1890, 63 f. 68.
- (廿三) Angell: Psychology, 1904, 65 f.
- Ward: Art. Psychology, Encycl. Britan., XX, 1886, 47.
- (廿四) Lotze: Medizinische Psychologie, 1852, 505.
- (廿五) Helmholz: Zur Lehre von den Tonempfindungen, 1877, 107.
- (廿六) Morgan: Introduction to Comparative Psychology, 1894, 14, 19.
- (廿七) Wundt: op. cit., III, 1911, 307 ff.
- (廿八) Rehmke: Bewusstsehn, 1910, 11-12.
- (廿九) Külpe: Monat, XIII, 1902, 38 f. 57.
- (三十) Külpe: Zeitschrift f. Philosophie u. philosophische Kritik, CX, 1906, 31 ff, 35.
- (卅一) Titchener: Feeling & Attention, 1908, 230-242.
- (卅二) Titchener: Psychological Concept of Cleanness.
- (卅三) 此關係に關しては吾人の考究なほ甚だ不充分なれど其一端は左記に略述して居るから參照せられたい。  
千葉、無意識(哲學研究 大正八年五月號より七月號迄)
- (卅四) Ebbinghaus: Abriss der Psychologie, 1900, 81 ff.